

氏 名 (国 籍)	盧 怡 慧 (台 湾)
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 3037 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	心理学研究科
学 位 論 文 題 目	高齢者の知恵の特性ならびに生活経験との関連の研究 －「人生設計課題」を用いて－
主 査	筑波大学教授 教育学博士 新 井 邦二郎
副 査	筑波大学教授 教育学博士 太 田 信 夫
副 査	筑波大学教授 柳 本 雄 次
副 査	筑波大学助教授 教育学博士 桜 井 茂 男

論 文 の 内 容 の 要 旨

(1) 論文の目的

本研究は Baltes らの「高齢者の課題解決アプローチ」研究に注目した Baltes&Smith (1990, 1994, 1995) は、知恵を人生の基本的な実践の専門家的な知識とみなし、「人生設計課題(人生において困難なジレンマを持つ課題)」とその測定法を提唱し、研究を進めてきた。その後 Baltes らはさらに 5 つの「知恵の側面」を提唱し、知恵的回答を判定するための「指標」とした。それらは (1) factual knowledge (事実に基づく知識), (2) procedural knowledge (手続き的知識), (3) life-span contextualism (ライフ・スパンの文脈論), (4) uncertainty (不確実性への処理能力), (5) value relativism (価値相対論) である。本研究では、この Baltes らの研究を下敷きとして、高齢者の知的効力のついで理解を深めるため、日本における「高齢者の知恵研究」を検討することを目的とした。

(2) 論文の概要

1 章と 2 章では高齢者の知的能力についての理論的検討を行った。

3 章では、大学生を対象として、日本人における暗黙の知恵観の解明を試みた。その結果、「問題解決における判断力、分析力、洞察力」、「自信とプラス思考」、「他人への配慮や共感性」、「経験とリーダーシップ」、「知識の豊富さと判断」などは、日本人の暗黙の知恵間において欠かせない特徴であることが示された。その中でも、対人スキルの重要性和強調すると同時に、他人への思いやりという心構えが日本人の知恵観に独特なものである傾向が推察された。さらに、「経験とリーダーシップ」及び「創造的思考力」は西洋では見出されない日本人の独特の知恵観であり、日本人における高齢者に対する役割の期待が反映されると考えられる。さらに 3 章の結果から、知恵の特徴には、知恵の活用、問題解決における分析力と判断力などの、具体的な生活場面に応用する知的能力を指すことが多く見られ、知恵は実生活における総合的な能力であると一般の人々の間に普及していると示唆された。この結果は Baltes らの「人生の実践的知識を活用するエキスパート」の観点と一致している。またこのことから、本研究では、「知恵は人生の実践的な問題について、適切に対処するための理解力、判断力、洞察能力などの知的能力である」と定義することが妥当と判断した。

4 章では、日本における高齢者の知恵を解明するため、Baltes の研究を参考にして、日本人に適用できる尺度を作成することを目的とした。本研究では多くの日本人にとって、人間関係の葛藤や不適応はもっとも悩みの多い

主題であると考え、人生設計課題及び評定基準を新たに作成し、「人間関係の葛藤」における知恵尺度の作成を試みた。本研究で作成した知恵尺度における人生設計課題を検討したところ、老年課題の場面間、及び成人課題の場面間に強い関連が認められた。このことは、測定された知恵が各々の場面に固有なものではなく、異なる状況に共通する性質を持っていることを意味する。また、知恵の5つの側面の間にも強い関連が示され、知恵指標として一貫性があったと考えられた。さらに、世代間の比較により、高齢者の知恵の特徴について以下のような示唆が得られた。世代間の比較において、高齢者は「ライフスパンの文脈論」「不確実性の処理能力」の側面により優れた得点を挙げたのに対し、「手続き的知識」の側面では大学生との差が認められなかった。このことから、高齢者は問題に適した解決策を想定する能力においては大学生と同様であり、この側面は高齢者固有のものではないと考えられる。それに対し、問題の周辺情報、事態の展開の推定などの能力が優れているということは、高齢者の知恵の特徴であると推察された。従来、世代別の比較において、若年層は高齢者より知的能力において優れた成績を上げることが報告されていた。しかし、本研究では、人生設計課題のような知恵課題においては高齢者は大学生と同様、またはそれ以上の成績が見られることが示唆された。このような結果から、高齢者の知的能力にも柔軟性が存在することが証明されたと考えられる。またこのことから、従来の知能検査では測定されない高齢者の独自の知的能力の特徴が、本研究によって明らかにされたと言える。

5章では、人生設計課題により測定された知恵の特徴をさらに解明するため、本研究は知恵と知能、認知スタイルとの関連から検討した。結果から、高齢者の人生設計課題における知恵は、認知的熟慮性と強く関連しており、流動性知能よりも、結晶性知能との関係が強いという特徴が明らかになった。

6章では、高齢者の年齢、教育、居住などの生育歴、及び高齢者の知的能力に強く影響すると言われる生活スタイル、ライフイベント、職業経験などの生活経験を挙げ、最後に精神的健康を挙げて、知恵との関連を検討することを目的とした。上述した多くの要因と知恵との関連を検討することによって、知恵の発達のメカニズムを解明することを試みた。

6.1節では、高齢者の生活経験と知恵との関連について検討したところ、高齢者の教育歴、及び読書経験、地域活動への参加などの生活スタイルは知恵に有益な影響を与えていることが示された。具体的には、教育は手続き的知識、ライフスパンの文脈論などのほとんどの知恵の側面に有益な影響を与えていることが示された。さらに生活スタイルにおいて、読書量の多い高齢者は、実用的知識が豊富であり、それを日常問題の解決に活用することが得意であった。このことから、読書活動は様々な領域において生じている人生の実際的な問題について考える機会を与え、対策をとることへの関心を高めたり具体的な解決策を得たりすることを促すと考えられた。また地域活動に参加している高齢者には、「価値相対論」などの側面において得点が高く、主人公の立場に立って考慮することができることが示された。このことから、普段の生活において、他人と積極的に接触することによって、高齢者は自分の経験を広げ、知恵を促進すると考えられる。

6.2節において、高齢者のライフイベントと知恵の関係を検討したところ、「ライフイベントの豊富さ」と知恵との強い関連が見られた。すなわち、自分にとって重要性の高いライフイベントを多く経験した高齢者ほど、問題解決の際に、知恵豊かなアドバイスを提供することができたと考えられる。また、仕事ライフイベントと知恵の密接な関係が示され、職場で体験した様々な出来事は、知恵を鍛え、高齢者の人生問題の解決にも役に立っていることが示唆された。6.3節においては、職場におけるストレスコーピングの方略と知恵との関係が見られた。知恵が豊かな高齢者は、積極的に苦悩に立ち向かうとは言い切れないが、問題や挫折に対し、回避や他のことに逃げるなどの方略をとらないことが明らかになった。また、知恵と精神的健康との関連は示されなかった。知恵が豊かであっても幸福感を感じるとは限らないことが明らかにされた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日本人の高齢者に適用できる知恵尺度を作成したことが高く評価される。多くの日本人にとっても、もっとも悩みの多い人間関係の葛藤や不適応の主題を用いた人生設計課題とその評価基準を新たに作成し、「人間関係の葛藤」における知恵尺度の作成を作成したことは、今後わが国における高齢者の知恵研究の先駆けとなるものである。また、高齢者の生活経験と知恵との関連について検討し、高齢者の教育歴、及び読書経験、地域活動への参加などの生活スタイルが知恵に有益な影響を与えていることを見出したことも貴重な知見である。さらに、「ライフイベントの豊富さ」と知恵との強い関連についても確認できたことも評価できる。しかし、一概に高齢者と言っても、個人差が大変大きいことをどのように研究していくのか、従来の知能測定とは異なるという位置づけを知恵の測定に行っているが、それらの関連をどのように研究していくかなどは、今後の課題である。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。